
She is Crazy.

御木国 オムタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

She is Crazy .

【Nコード】

N3154Q

【作者名】

御木国 オムタ

【あらすじ】

「彼女」は転生した人。「彼女」は賭けをした人。
「彼女」は「息子たち」を愛した。それが「彼女」の復讐。
復讐が成った後「彼女」は夜に飛び出した。
これから起こる全ての悲劇を避けるために。
全てを終えた後、「彼女」は灰になる。
狂った一人の女の話。

（前書き）

ネタ・厨二・アンチ思考・夜中テンションの産物。やや腐。
ジョジョが好きな人はむしろ読まない方がいい。
ゼロ以下の匂いの代物。

見慣れた部屋はCHICK^{シック} ベッドに眠る私はSICK（病氣）
時計の音はTICKTACK^{チックタック} 死ぬにはNICK（丁度いい）

緩んだ頭の中に浮かぶアルファベットの言葉遊び。

どうやら、もう時間はないらしい。私は枕元のベルでメイドを呼ぶ。

「……二人を、呼んできてちょうだい……」

メイドの顔が強張る。承知しました、と消えるような声で呟いて部屋を出た。

その気配が遠ざかるのを感じる。私はくすくすと小さく声を上げて笑った。

ゆるりと身を起こして、髪を軽くブラッシングする。

伝えるべきことを伝えたら、『私』はこのまま死ぬだろうから。

今から来る二人——私の可愛い子供達——には少しでも、

美しい姿の私を覚えていて欲しいのだ。

長く話すだろうから、喉も潤さねば。枕元の水差しを呷った。

バタバタと騒がしい足音。それが扉の前で止まる。

数拍の間が空いて、コンコン、とノックされる。

ああ、なんて紳士的に育ったものかしら、私の可愛い子供達。

「お入りなさい」

ためらいが扉越しに伝わってくる。きっと、最期になるだろうと二人も覚悟している。

「……失礼します」

「具合はどうですか、義母さん」

先に扉を開けたのは黒髪の子。私と夫の実の息子。

先に入ってきたのは金髪の子。故あって引き取った養子。

可愛い可愛い私の息子達。

「今は凄く元気よ。さ、こちらへ来て座ってちょうだい」

満面の笑みを見せて、二人の名前を呼んだ。

「ジョジョ、ディオ」

「二人とも、母さんに前世の記憶がある、と言ったら信じるかしら？」

「前世、ですか？」

ジョジョは興味深く目を丸くし、ディオは悲しげに目を細める。

多分、ディオは私の病気が頭に回ってしまったと思っているのだろう。

その考えは、おおそ間違いではない。

「ええ、そう。私は遠い遠い小さな島国、ジャパンって言うてわかるかしら？」

「はい。最近よく新聞に出てますね」

最近はまだ新聞を読まなくなったから忘れていたが、この時期のイギリスとはもう国交があるのか。

「あんな極東の島国がなんだというんです？」

「あら。そうやって馬鹿にしていると、ロシアの艦隊を沈めちゃうんだから」

随分と古くなった記憶を口にする。長くイギリスで暮らしているが、どうもまだ私の根本は日本にあるらしい。

「とにかく、母さんはうんと未来……百年ちよつと後の、日本の女の子だったの」

「百年も後の？ 想像がつかないなあ」

ジョナサンは優しい子ね。きっとこの子も、ディオと同じように今の話は病に侵された私の絵空事だと思ってる。

それでも、私に話を合わせてくれているのだ。見てろ。今に目を剥かせてやる。

「それでね。母さんはある日、一つの物語を読むことにしたの。」

それは色んな人が、とても面白い、と言っていた物語」

目を細めて、二人を見て、そのタイトルを口にする。

「名前は、『ジヨジヨの奇妙な冒険』」

「はは。もしかして、僕達が主人公？」

「そうよ」

即答すると、ほんの少しだけ二人の顔が強張った。構わずに、続ける。

「全六部の、とても長い物語。ジヨナサン・ジョースターとディオ・ブランドー。」

二人の少年の運命が交わるところから、物語は始まるの」

「……六部もあつたら、終わる頃には僕達はお爺さんですね」

黙っているのも辛くなったのか、ディオが相槌を打ってくる。

「そんなことないわ。だって、ね」

さあ、これだ。私はこれを言うために、今までここに居たようなものだ。

「ジヨナサンは二十歳で、ディオに殺されてしまっただもの」

二人の顔が、凍った。

「ディオはね、本当の父親を毒殺した後、故あってこの家に迎え入れられる。」

そしてジョージも財産を乗っ取ろうとたくらむけど、ジヨナサンに見抜かれる」

それからのことを、私は流行りのオペラ歌手もかくやと言わんばかりに朗々と歌う。

「吸血鬼になったディオとジヨナサンの戦いはジヨナサンが死んで終わるの。」

ジヨナサンの孫は吸血鬼より強い化け物と戦うわ。

さらにその孫は、ジヨナサンの体を奪ったディオを、今度こそ殺す。

ジヨナサンの孫が浮気して作った子供が、ジヨナサンの孫の孫と一緒に殺人鬼を倒すし、

ディオの子供はギャング集団のボスになって……、でも最後は駄目なの。

ジョナサンの孫の孫は、ディオの親友に殺されて、世界は終わってしまうの」

そこから先は詳しくもないし、きっと私の行動には関係ない。

だって、私の望んだ通りの終わり方をしてくれなかったのだから。

「だからびっくりしちゃったわ。私の結婚相手が、

あの人に、ジョージ・ジョースターに決まった時は」

「は、はは、凄い話ですね。母さん、今からでも作家になったらどうです？」

ジョナサンが苦笑する。ディオの目が昏い。あら。父親を毒殺は当たってたかしら。

「……何故、ですか」

「え？」

「そんな物語を知っていたら、普通……、ディオに、愛情はそそがない、でしょう」

……違った。泣きそうなのだ、この子は。そういえば、意外と泣き虫なのだ。

「決まってるじゃない」

その頭を抱え込んで、優しく抱きしめる。愛しい愛しい私の子供。

「……貴方を愛することが、あの物語のディオへの、最大の復讐だからよ」

一瞬ホッとして力を抜いていた体が、一気に強張るのが解る。

ちらりと見やれば、ジョナサンの顔が青白い。

ディオを離して、笑む。

「愛されて幸せだったでしょう？ この家の財産を乗っ取るうとは思わないでしょう？」

ましてや、吸血鬼の存在なんて信じないでしょう？」

「……義母、さん……？」

「ああ、心配しなくてもいいのよ、ディオ。貴方のことはちゃん

と愛してるわ。

もちろん、ジョナサンのことだってね」

ぐりん、と首をそちらに向けるとジョナサンがびくりと身を震わせた。

「でもね、これが復讐。これが、決着。

……あの物語を読んだ女の子が、抱いた感情を、どうにかするための」

死んで欲しくなかった人がいた。大好きだった人がいた。

あの笑顔が曇ってしまうような世界が嫌だった。

あの人を犠牲にしたのに、救われない世界が嫌だった。

そんな、子供じみてキチガイじみた感情のなれの果てが、私だ。

耳まで裂けると言わんばかりに、唇に大きく弧を描かせる。

「貴方達の幸福は、貴方達の後に紡がれるはずだった物語と命と、引き換えなのよ」

ジョセフが生まれない。承太郎も生まれない。仗助も、徐倫も。

ジョルノが生まれない。ヴェルサスもリキエルもウンガロも。

「……義母さん、お願いだから正気に戻ってください、義母さん！」

ディオが私の肩を掴んで揺さぶる。吸血鬼^{バケモノ}なんかになるくせに、

この子は意外と常識的な物事の考え方をする。

「ほらほら泣くんじやないのディオ。母さんはいつも通りよ。

……ジョナサンの母親になるって解った時から、

ずーっと、母さんはこう考えてきたんだから」

だから、雨の日に崖沿いの道を馬車で行く時も自分の周りに洋服をぎっしり積んだ。

賭けだった。あそこで死ななかったら、ずっとこうすると決めていた。

枕の下に、手をやる。こつりと固くて冷たいものが当たる。

二人の顔が青ざめる。力なく、傍らの椅子で肩を落としている。

その瞳に宿した感情は、壊れた母への嘆きか。

憎まれていたが故に愛されていたという想像だにしなかった矛盾へ

の困惑か。

それとも、後へ続くはずだった命を自分の幸福が潰したという申し訳なさか。

そんな二人の表情を見ると、胸に込み上げてくるものがある。

「……これから、最後の実験。もしこれがうまくいけば、

母さんの言ったことに意味があつたし、

失敗すれば母さんは頭に病気が回っておかしくなつてただけって思いなさい」

枕の下から取り出した、仮面。市で見つけた石の仮面。それともう一つはナイフ。

そのナイフで思い切り、自分の腕を切り付けた。

「ッ！」

二人が止血するより先に、溢れ出る血を仮面に塗りたくつて、被る。

どすり

ずぶり

私の頭に刺さつた骨針が、私の脳を刺激する。
私を、吸血鬼^{バケモノ}に変えていく。

「あは——はは、あは、あはははは——！」

笑いが止まらない。復讐してやった。私が大好きなあのキャラを、死なせた、血筋に！

波紋戦士はいない、時を止める学生はいない、優しい力を持つ子供も、

糸を操る女の子も、生命を生み出すギャングも、他にも、

みんなみんなみんな、私が殺してやったんだ！

歴史を書き換えてやった、これでいいんだ！

「アハハハハハハハハ！」

顔に仮面を被ったまま、私はベッドから鬼のような早さで身を起こす。

縋る二人の手を振り切って、窓を開けて空を見上げる。

真黒な空。曇った空は銀色に輝く月だけを浮かべている。

星は見えない。それが心地いい。

「さようなら、ジョナサン、デイオ！ 可愛い私の子供たち！！」

世界の犠牲の上に幸福だった私の子供たち！！」

私の背丈よりもずっと大きい窓から、外へと身を翻した。

ここは二階。普通の人間だったら、そのまま死んでいる。

だけど私は吸血鬼^{バケモノ}。落ちた時に折れた骨はあつという間に再生する。

駆けていく。夜を駆けていく。どこまでもどこまでも、駆けていく。

可愛い二人の悲鳴が聞こえた気がしたが、それは風の音に紛れて遠かった。

『ジョースター卿夫人メアリー 行方不明』

新聞の片隅に、そんな記事が載ったのはそれから一月後のことだった。

優しかった母がいなくなってしまった、というインタビュー記事が掲載されていた。

でも半年後の新聞には、ジョナサン・ジョースターがエリナ・ペンドルトン嬢と

結婚したという記事を見つけた。そのフラグは折れなかったか。

二人はあの後、まああの時代の平均年齢くらいまではしっかりと生きたらしい。

インターネットで百年以上昔の新聞が検索できるのだから、

やっぱりこの日本という国は凄いな、とネカフェのボックス席で伸びを一つ。

店舗内蔵書検索のページを開き、『ジヨジヨの奇妙な冒険』と入力する。

検索結果は0件。当然だ。この世界には存在しないのだから。それを確認した後で、私は鞆から一冊の本を取り出して目を通す。最近流行りのオカルト本で、作者は岸边露伴という一人の青年。絵ではなく文芸の世界に行ったか、と少々興味深く思いながら読み進める。

タイトルは『メアリーは何処へ消えた？』だ。

メアリー・ジヨースター夫人は一種の都市伝説として人気を博している。

この本は、そんな彼女の噂についてまとめたものだ。

チベットの秘密技術を持った僧侶達の下へ突撃して秘宝を奪ったとか。

ローマのコロッセオを破壊して、地下に眠っていた化け物を退治したとか。

ある遺跡を調査した青年を惨殺して、彼が掘り出した何かを海に捨てたとか。

赤ん坊をすりかえようとした一人の母親を諭したとか。

フランスの田舎町で悪漢に襲われそうになった少女を助けたとか。

突拍子もない噂ばかりでリアリティというものにまるで欠けているが、と

不満そうに調べを進めていた彼は、しかし最後にある男に話を聞き考え込む。

男は、言う。

『彼女は、俺がひでえ目に遭う未来を知ってて、それをどうにかしたかったんだって言ってた』

男はフランスで救われた少女の兄で。面と向かってメアリーにそう言われたと。

『筆者はふとこんな疑問を抱いた。彼女は本当に未来を見ていて……、
そしてこの男を救うためだけに、バケモノになったのではないか？
だとしたら、実に狂っている。不確定な未来のために、己の幸福
を捨てたなど』

「わかってないなあ」

小さく呟いて、本を閉じた。

その男を救うことが、メアリーの幸福だったと、考えられないもの
か。……無理か。

そう。私は出来ることをやった。エイジャの赤石を破壊して。
まだ眠っている内にカーズ達を殺して。

ディアボロを殺して、パツシヨーンと弓矢をなかったことにして。
ブッチとウエザーは兄弟のままで。シェリーを死なせないで。

私は私に出来ることをした。もう十分かな、と思う。

本によれば、インタビューされた男は結婚して子供もいるらしい。
あれから十数年も経つんだ、そうもなるだろう。

インタビューされた男は、最後に筆者にこう告げている。

『もし、あんたがメアリーに会ったら伝えてくれよ。俺は幸せだ、
ってな』

「……もう、いつかあ」

その一言が嬉しくて。彼が幸せなのが嬉しくて。冷たい体の胸に、
温かいものが満ちる。

ジャンピエール・ポルナレフが幸せなら、もうこれ以上私は何も望
むまいよ。

ひいお爺ちゃんのそのまたお爺ちゃんと、その血の繋がらない兄弟のお墓参り。

ひいお爺ちゃん夫婦とお爺ちゃん夫婦、それに父さんや母さんと一緒にそこを訪れるのは、

物心ついた頃からの年に一度の旅行の日程に組み込まれている。

今日は雨。日差しはちつとも出ていない。

「あら？ お墓の前に誰か居るわね」

お婆ちゃんが首を傾げる。親戚は少なくないが、その誰でもなさそうだ。

「あの……うちのお墓に御用ですか？」

振り向いたその人は、綺麗な黒髪をしていた。

この人には夜が似合いそうだなと、漠然と思った。

女の人はにっこりと微笑んだ。

「ここに眠ってるのは、私の可愛い息子達なんです」

二つならんだお墓。名士だったと言う割にはシンプルなお墓。

ひいひいひいお爺ちゃんと、その兄弟だった人のお墓。おかしいことを言う人だなあ。

「……伝言を、預かって、います……」

心臓が止まりそうだった。

ボケだして、最近は滅多に喋らなかったお爺ちゃんが口を開いた。

「それでも、貴方の愛を、忘れない、と」

「……紳士ね。二人とも、本当に紳士。壊れた母親のことなんて、忘れてしまえば、よかったのに」

その人は寂しそうに苦しそうに、だけど満足そうに微笑んだ。それから、私達を見据えた。その目にゾツとした。

何よりも愛しいものを見るような目だった。

なのに、その目には憎しみの炎が燃えていた。

「生まれて、生きて、幸せになっちゃったのね、結局」

星はなくてもよかったのに、と呟いているその人の口に覗く尖った

牙。

「『吸血鬼メアリー』？」

小さく問うた私の口を、父さんの大きな掌が塞いだ。

オカルトマニアの間で話題の都市伝説。それが自分の血筋だって、知っていた。

その人は笑っている。

「ええ、そうよ、ジョリーン」

「なんで、私の名前」

「……承太郎、あなたブログに娘の実名出すのやめなさい」

父さんが帽子のつばを深く被った。照れくさい時のよくやる行動だ。つていうか何してんだこの人。

「ああ、でも嬉しいわ。あなたは彼の友人にはならなかったけど、あなたは道を誤らなかつたんですもの。家族と幸せなんですものでもね、と続ける。

「きっと、彼が幸福でなければ、こんな風に笑って話してはなかつたでしょうね」

「あんだ、知ってる、のか」

父さんが突然そんなことを聞いた。メアリーは首を傾げて、ハツとした。

「……あなたも、知ってたの？ 悪霊を恐れて牢屋に閉じこもる自分を？」

「……思い出した頃には、俺のやれることは、俺の周りにしか残ってなかつた」

父さんが答える。何の話だろう。

「そっかあ。……じゃあ、任せてもよかったのかなあ」

あーあ、無駄なことしちゃったかも、と笑っている。

なんだか、私と変わらない年頃の女の子に見えた。

「それじゃあ、さようなら。私の可愛い子供達の子供達」

メアリーが、満面の笑みを見せた。

その笑顔が、怖かった。

「貴方達を愛して……、貴方達を憎んでた」

取り出したのは一本のライト。なんかで見たことがある。

あれはそう、紫外線を出すライトだ。そのライトを胸にかざすと、私達の見ている前でサラサラと、その人は灰になってしまった。

狂ってたんだ、彼女は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154q/>

She is Crazy.

2011年1月26日02時46分発行